

「秋田蘭画」と近代日本の知識人たち

今橋理子

江戸時代中期に誕生した画派「秋田蘭画派」は、近年、辻惟雄著『日本美術の歴史』（東京大学出版会、二〇〇五年）にも記載される重要な江戸時代画派のひとつであるが、一般的にはいまだマイナーであるかもしれない。

今から二三〇年ほど前、十八世紀後半の江戸に、日本在来の画材を使って、異教にも本格的な洋画（当時の洋画はいわゆる油画ではないため、美術史的には「蘭画」あるいは「洋風画」と呼ぶ）を試みた、五人の若き芸術家たちが現れた。彼らはいま東北・秋田藩ゆかりの大名やその家臣たちであったため、現代では「秋田蘭画派」と呼称しているのである。当時彼らは二十歳代半ばで、博物学をはじめとする、時代の先端をゆく学芸に対し好奇心旺盛な青年たちであった。彼らの描いた蘭画の多くは、舶来の銅版画等に影響を受けつつ、当時流行の中国風花鳥画体・沈南蘋流に見られる細密描写と構図法を用い、さらに西洋画的な遠近法をも導入して花鳥画と風景画を組み合わせた。

その後江戸に戻った源内の後を追うように、直武は、おそらくは表向き「藩司（銅山方産物吟味役）」という役職を受けて江戸へと入り、源内のもっと本格的に洋画修行を開始する。そしてやがて秋田（久保田）藩八代目藩主・佐竹義教（号曙山、一七四八―一七五五）、角館城代・佐竹義躬（一七四九―一八〇〇）、秋田藩士・田代忠国（一七五七―一八三〇）、荻津勝孝（一七四六―一八〇九）らを巻き込んで、藩内において「蘭画熱」が一挙に広まり、ひとつの芸術活動のサークルが形成されたのである。

彼らは身分差を超えてかなり親密に交流し、急速に洋画制作にのめり込んでいったらしい。このサークルでは、江戸の市井にあって自由に絵画修行ができた、比較的下級の小田野直武が実質的な指導者となった。そして彼らは、秋田ではなく主に江戸において蘭画を制作していたことがわかっている。だがしかし、彼らの活動はわずか六年ほどで突然幕を降ろすことになる。安永八（一七七九）年十一月、あやまって人を殺めた平賀源内が獄死。源内宅にほとんど寄宿状態にあった直武は、おそらくはそれに連座する形で故郷において塾居を命じられ、おそくはそのまま五月後の安永九（一七八〇）年五月、彼は突然に「二世を去る」のである。死因は今でも明らかではない。そしてこの直武の急逝により、秋田蘭画派の活動には終止符が打たれ、作品の多くは歴史の中で埋もれていった。そのため、今日でも遺存している秋田蘭画派の作品数は、極めて限られている。

忘却の時を経て、「近代」を迎えた明治時代に至り、はじめてその真価が見出されることになる。

秋田蘭画「発見」の真実

秋田蘭画派については歴史的に初めて光を当てたのは、明治の日本画家・平福百穂（一八七七一―一九三三）であり、従来美術史的にも、百穂が秋田蘭画の「発見」者であると考えられてきた。

平福百穂は、若くして亡くなった父徳庵（一八四四―一九〇二）年に修行のために上京する。それは奇しくも、直武が江戸に出たのと同じ、二五歳の時であった。百穂が上京した一九〇〇年前後の日本では、芸術家たちは等しく時代の先端をゆく「西洋画」を描くのか、あるいは伝統を重んじつつも新しい

「秋田蘭画」と近代日本の知識人たち

今橋理子

という、十八世紀当時としては極めて前衛的で、個性的な表現であった。

秋田蘭画の誕生と終焉

安永二（一七七三）年夏、阿仁銅山の開発のために秋田藩に招聘された博物学者・平賀源内（一七二八―一七七七）は、旅の途次、寄宿した角館（現在の秋田県仙北市角館町）で、偶然に画才のある角館藩士・小田野直武（一七四九―一七八〇）を見出し、直ちに洋画法を伝授。現在も語られる伝承では、この時源内は直武に、真上から見た饅餅の図を描かせ、出来上がりだったその絵を見て「これではお盆であるか、ただの丸（まる）であるかわからない」と言い、直武に洋画の陰影法を教えたのが、この画派の始まりと言われている（しかしながらこのエピソードは、やはり芸術家伝説として、近代に作り出された話のようである）。

今橋理子
秋田蘭画の近代
小田野直武「不忍池図」を説く
今橋理子
江戸の動物画
近世美術と文化の考査
A5判・三七六頁・六三〇〇円
東京大学出版会 表示は税込価格

られており、現在でも作品がアートフェアやオークションなどに偶然に現れると、コレクターや古美術商たちの間で「幻の秋田蘭画」などと呼ばれることがある。

さて、今こそ日本美術史の教科書にも、重要な江戸時代画派のひとつに挙げられている秋田蘭画派であるが、実はこの江戸時代当時には画派としての存在はおろか、全くと言ってよいほど画家や作品の存在は知られていなかった。おそらくその理由は、秋田蘭画派の作品が所謂「売り絵」ではなかったためであろう。わずかに残る記録からは、藩主・佐竹曙山周辺に存在した一部の蘭華大名（阿蘭陀文物や洋学を愛好した大名たちのこと）や、あるいは秋田蘭画サークル周辺の文化人たちの間のみ、需要されたと考えられるのである。

そうした中、百穂が小田野直武ら秋田蘭画派の存在について友人・国府厚東（一八七三―一九五〇、漢詩人、雑誌や新聞記者を経たのち宮内省御用掛となり詔勅などを起草した）を通じて、偶然にも初めて知り得たのはちょうどこの頃だと言う。直武が、同郷角館出身であったことも相俟って、相当なショックを受けた百穂は、直ちに秋田蘭画派の調査・研究を開始する。そして秋田蘭画に関する最初の報告をしたのは、明治三六（一九〇三）年十一月五日付の『美術新報』誌上であった。

百穂が秋田蘭画に対して衝撃を受けた理由は、主に二つあったと思われる。第一には、自分と同郷の小田野直武が、実質的に「日本画」の創造を目指すのか――という極めて難しい選択を、迫られるような時代であった。若き百穂もそれは例外ではなく、彼の知人たちが後に回想しているように、相当に苦悶した様子が見られる。

美を生きるための26章

芸術思想史の試み
木下長宏 ラスコ、大興寺、フーコー、尹東柱、…太古から現代まで人類知を照らしつづける26の星座をめぐる卓抜な芸術論。¥5250

われらのジョイス

5人のアイランド人による理想オコナー編著 昼も夜もヘソの絡のように故国にくっついてたジョイス。細部から新発見にみちびく絶好の案内。 宮田恭子訳 ¥3380

〈東京国際ブックフェア〉記念復刊

アーレントとハイデガー エティンガー ¥2835/心理学的医学 ジャネ ¥3780/オルレアンのうわさ モラン ¥4620/ユダヤ人の歴史 ロス ¥3990

東京文芸本舗 **みすず書房**
5丁目3-21
tel.3814-0131 fax 3818-6435 (税込)
http://www.mszc.co.jp

きと悲しみは、底知れぬものであったようである。百穂が逝去して半年後、土屋文明が編集責任となり刊行された特集号『アララギ 平福百穂追悼号』（第二十七巻第四号、昭和九年四月）には、「アララギ」同人ほか合計一〇九名もの人々が短文を寄せている。とくにその中でも、茂吉と憲吉の追悼文は群を抜いて長文であり、その内容も公私にわたり深めた友情の軌跡を読み取ることができ、興味深い。国府厚東もまたこの特集号に対し、茂吉らに次ぐ長文の追悼文「百穂畫伯の苦練時代の観」を寄せている。この一文の中に、百穂と秋田蘭画の出会いを物語る重要なエピソードが語られており、それによると、何と近代日本の知識人を代表する科学者、思想家の狩野亨吉（一八六五―一九二二）が、すでに（川上三槐や）百穂以前の明治（二年代）、秋田蘭画派の存在について気づいており、かなりの数の文書類を収集していたと言っている。

一七世紀の光
—オランダ建築画の巨匠サーンレダム—
持田季未子
高い窓から陽光が降り注ぎ、やさしい光が教会内に満ちて描かれた静謐な世界。孤高で画家の本邦初評伝。 四六判・定価3150円
天使とボナヴェントウラ
—ヨーロッパ13世紀の思想界—
坂口ふみ
天使とは誰か、この問いを鍵として中世の思想的秘密に迫る。諸思想のつばを舞台とした、13世紀の壮大な思想のドラマ。 四六判・定価3465円

少年期ヴェーバー 古代・中世史論
マックス・ヴェーバー
今野 元編訳
マリアンネのヴェーバー伝記に言及されてその後行方不明となったヴェーバーの作品を、世界に先駆けて紹介する。 四六判・定価2625円
【岩波テキストブックス】技術の哲学
村田純一
技術に関する従来の見方の変遷を歴史的に追うとともに、対概念との関係を考察軸に、具体的な事例を交えて技術の実相を明らかにする。 A5判・定価2625円
岩波書店
東京・千代田一ツ橋
〒100-8385 [定価は消費税5%込み]
http://www.iwanami.co.jp/

に、日本における本格的な洋画制作のパイオニアだったという点。また第二には、秋田蘭画派における洋画制作が、基本的に東洋画（日本画）の範疇を完全に破るものではなく、むしろそこに「西洋画」の技術や「洋風」という要素を、いかに「組み込む」あるいは「融合させる」かということを志向していた――といった点である。それは、絵画における「和魂洋才」のあり方を当時まさに模索していた画家百穂にとっては、ある意味で先人の業績の中に、その問題への解決の糸口を見出したように感じられること、思われるのである。

以後、彼は折に触れてさまざまな雑誌や新聞紙上において秋田蘭画研究の成果を発表し続け、ついに四半世紀以上の時を経た昭和五（一九三〇）年二月、岩波書店より大著『日本洋画曙光』（実は「日本洋画曙光」とするのが本来の書名で『日本洋画曙光』の序文の序文の）を刊行する。同書の序文の中で、百穂と交流の深かった徳富蘇峰が寄せている。菊四倍刊、本文九八頁、上装紙入という大型の豪華美術書として制作された同書は、定価三十円、わずか限定三〇〇部の発行であった。そのため、現在も同書を取藏している公共図書館は限られているため、貴重書であることは疑いない。

ところで、『日本洋画曙光』の美術史的な重要性はすでに周知のものであり、近年までの秋田蘭画研究も、同書の内容を踏まえた形で当然のごとく進められてきた。ところが近年私は、改めて百穂の秋田蘭画研究の足跡を辿り直してみたところ、まきと悲しみは、底知れぬものであったようである。百穂が逝去して半年後、土屋文明が編集責任となり刊行された特集号『アララギ 平福百穂追悼号』（第二十七巻第四号、昭和九年四月）には、「アララギ」同人ほか合計一〇九名もの人々が短文を寄せている。とくにその中でも、茂吉と憲吉の追悼文は群を抜いて長文であり、その内容も公私にわたり深めた友情の軌跡を読み取ることができ、興味深い。国府厚東もまたこの特集号に対し、茂吉らに次ぐ長文の追悼文「百穂畫伯の苦練時代の観」を寄せている。この一文の中に、百穂と秋田蘭画の出会いを物語る重要なエピソードが語られており、それによると、何と近代日本の知識人を代表する科学者、思想家の狩野亨吉（一八六五―一九二二）が、すでに（川上三槐や）百穂以前の明治（二年代）、秋田蘭画派の存在について気づいており、かなりの数の文書類を収集していたと言っている。

近代日本の知性と の邂逅、そして現代へ

では、狩野亨吉とはいかなる人物であったのだろうか……。狩野亨吉は百穂と同様に秋田県（現在の大都市 出身の学者で、天文学者であり数学者、そして哲学者、そして知られた人物である。大学予備門を経て東京帝国大学数理学科と哲学科を卒業。大学院をさぐりに経たのち教育者となり、三四歳の若さで第一高等学校校長となった。その後、京都帝国大学文科大初代学長となったが二年後に突然辞任。以後は小石川の長屋にあって「書画鑑定並びに著述業」の看板を掲げ、書画・刀剣の鑑定で生計を立てながら、生涯在野の学者として通した。彼の多々ある業績の中でも、江戸時代の独創的な学者や思想家を数多く発見したことが特筆されるが、こと天文学者・志筑忠雄（一七六〇―一八〇六）、経世家・本多利明（一七四三―一八一

つたく思いがけない事実として、百穂が秋田蘭画の「発見」者であるとは、厳密には呼べないことが明らかとなった。また最近では村角紀子氏によって、秋田蘭画について初めて報告した論文は、雑誌『文藝界』明治三六年三月号に所載された、川上三槐（本名邦基、日本建築史の研究者か）による、「洋画の先覚者小田野直武」という論文であることも報告されている。ここでは紙数の関係上すべてを記すことができないので、詳細は拙著「秋田蘭画の近代」（東京大学出版会、本年四月刊）の第I部「『不忍池図』が無かった時代」に譲るが、先にも記したように、平福百穂が秋田蘭画の存在を知り得たのが、友人・国府厚東を通じてのことであったことに始まり、彼はそうした秋田蘭画との出会いについてのエピソードを、生涯を通じて（おそらくは意図的と思われるのだが）なぜか正確に記すことはなかったのである。



挿画 小田野直武筆「不忍池図」 絹本着色、一幀、秋田県立近代美術館、重要文化財

〇）、医師で思想家の安藤昌益（一七〇三―一七六二）の存在と業績を、世に知らせた功績は大きい。

せ、世に紹介する仕事を成したことを考えてみると、同様に十八世紀を生き、そして進取の気性でもって新しい絵画世界を創ろうと試みた秋田蘭画家たちに、このほか狩野が興味を抱いた可能性は十分に考え得る。しかもこれら全ての人々は、みな何らかに「秋田」に関わる人物たちなのである。

平福百穂が親友の国府厚東を通じて、初めて秋田蘭画の存在を教えられたことを、なにに生誕語することをしなかったのかは不明である。それは彼の大著『日本洋画曙光』が、今日でも美術史上上の功績としてやはり輝くものであるだけに、見えなない陰の部分映し出し、私心を複雑な心持ちにしてみよう。

だが、そうしたことを理解した上で改めて秋田蘭画派の作品の前に佇む時、直武や曙山の作品たちは、「近代」という時代の訪れを持って、そしてその圧倒的な創造力でもって、明治という新時代の若者たちに、芸術の未来を語りかけた――その瞬間

【新刊】劇場のアイデア
G・カミッロ/足達
古代の記憶術を革新し、二一世紀のヴァーチャルなアーカイヴへと連続する。ルネサンスの記憶術たる（記憶の劇場）すなわち立体的集積回路をはじめて構想した古典的名著――膨大な訳註と解説論文でその意義と具体的構造にせまらる。 定価6300円
ローマ百景Ⅰ
建築と美術と文学と
M・ブラーツ/白崎他
永遠の都ローマを知り尽くした頭脳が、何気ない広場や街路や付まいに秘められた、深い歴史の意味と哀情と芸術的精華を語る。第2弾
定価5040円
増補新版
ローマ百景Ⅱ
建築と美術と文学と
M・ブラーツ/伊藤他
定価5040円
ミュージアムと記憶
知識の集積/展示の構造学
S・クレイン編著/伊藤監訳
歴史が相互に作用しあうサイトとして、時代と場所とジャンルを自在に横断/総攬し、近未来のポスト・ミュージアムを解き明かす。 定価6300円
【著作集全7巻完結】
アビ・ヴァールブルク著作集
全7巻・別巻2
伊藤博明+加藤哲弘 監訳
別巻1「ムネモシュネ・アトラス」
別巻2「イメージの政治学」
ありな書房
〒113 東京都文京区本郷1-5-15
TEL.03(3815)4604